

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

負債の動態に関する比較民族誌的研究

2020年度第1回研究会（通算第2回目）

日時：8月26日（水）13:00–18:00, 2020年8月27日（木）9:00–16:00

場所：AA研大会議室（303）

使用言語：日本語

共催：AA研共同利用・共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究」、
科研費（基盤B）「負債の動態をめぐる比較民族誌的研究：アジア・アフリカ・
オセアニア農村社会を中心に」（研究代表者：佐久間寛（明治大学） 課題番号：
19H01388）

8月26日

13:00-14:30 酒向溪一郎（立命館大学）

「スンバ島の変容する人と家畜の交換ゲーム」

14:45-16:15 河野正治（AA研共同研究員，東京都立大学）

「称号の負い目を想起する：ミクロネシア・ポーンペイ島における首長制と
祭宴の事例から」

16:30-18:00 箕曲在弘（AA研共同研究員，東洋大学）

「実践のなかの民主主義—ラオスのコーヒー産地におけるインフォーマル
な金貸しと農家の関係」

8月27日

9:00-10:30 関野文子（京都大学）

「分配をめぐる負い目と相互行為・開発プロジェクトにおける資源分配を
めぐるジレンマ—カメルーン狩猟採集社会とスリランカ先住民社会の事例から—」

10:45-12:15 佐川徹（AA研共同研究員，慶應義塾大学）

「『暴力の貸しを取り返しに行く』—ダサネッチにおける復讐／感染／代替
の論理」

13:15-14:45 酒井隆史（AA研共同研究員，大阪府立大学）

「国家とは何か」

15:00-16:00 全員

総合討論&打ち合わせ

概要

2020年度第1回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと対面・オンライン併用型で開催した。2日間にわたり6名の報告と22人の参加者による議論が行われた。司会は両日とも佐久間が務めた。

また打ち合わせ事項として、本研究会を受け皿に、2021年度日本文化人類学会公開シンポジウムを企画することで合意した。同シンポジウムでは、小川さやか、佐川徹、松村圭一郎、箕曲在弘の4名が報告を行うことを決定した。

本研究会の報告の概要は下記の通りである。

(佐久間)

「スンバ島の変容する人と家畜の交換ゲーム」

酒向溪一郎（立命館大学）

スンバ島に関する従来の人類学研究は、その社会が持つ複雑な社会構造を成立させている親族集団の婚姻と縁組を明らかにしてきた。先行研究において、家畜は交換財や供儀獣として、人間により利用・操作する財として描かれてきた。他方、近年の人類学では、人と動物が情緒的な関係を育み、生物種を超えた連続性のなかで贈与交換の関係が築かれるという見方を提示している。以上の人類学の理論的な展開を踏まえ、本発表では、従来のスンバ社会を維持・再生産してきた人間どうしの贈与交換には、人間と家畜の関係性が織り込まれた上に成立していることを明らかにした。さらに、市場経済の浸透とともに人と家畜の関係性が変容しつつある可能性を指摘し、今後の展望としてスンバ島の社会変容を提示した。

(酒向)

「称号の負い目を想起する：ミクロネシア・ポーンペイ島における首長制と祭宴の事例から」

河野正治（AA研共同研究員，東京都立大学）

サーリンズの類型論の意義を負債の概念から再照射したクラストルの議論によれば、「首長が社会に負う社会」としてのビッグ・マン制に対し、ポリネシアやミクロネシアの首長制は「社会が首長に負う社会」と理解できる。しかし、ミクロネシア・ポーンペイ島では、負債の媒体としての称号が物質的な形をもたないがゆえに、負債の刻印をめぐる人びとの記憶は、曖昧にならざるを得ない。本発表では、称号保持をめぐる誤解・行き違い・読み替えに関する事例から、「社会が首長に負う社会」という想定に反して、「誰がどのような称号をどの首長に負っているのか」は必ずしも事前に了解されているわけではなく、対面状況において事後的に確認されなければならないことを指摘した。結論部では、「首長に

負うこと」が不均質に現れるという事態に着目すれば、首長に対する島民の多様な向きあい方を掬い上げる点にも、負債の概念の発見論的な含意を見いだしようと論じた。

(河野)

「実践のなかの民主主義—ラオスのコーヒー産地におけるインフォーマルな金貸しと農家の関係」

箕曲在弘 (AA 研共同研究員, 東洋大学)

本発表では、ラオス南部ポーラヴェン高原のコーヒー生産地域における農家の生活上のリスクへの対応の仕方のひとつとして、農家によるインフォーマルな金貸しの利用の仕方について検討した。この金貸しは農家が困窮する雨季のあいだに売買契約を結び、農家に前払いをすることで、農家の現金の枯渇という問題を解消する役割を担っていた。しかし、収穫期のコーヒーの実の買取価格よりも低い価格で契約するため、結果的に農家は困窮することになる。したがって、これまでの研究ではこうした金貸しは批判的に論じられてきた。これに対し、本発表ではデヴィッド・グレーバーの民主主義論を援用することにより、両者の関係のなかに「平等志向の意思決定プロセス」が見出せることを指摘し、国際市場への依存から相対的に自律した政治空間の発現を見出した。

(箕曲)

「分配をめぐる負い目と相互行為・開発プロジェクトにおける資源分配をめぐるジレンマ—カメルーン狩猟採集社会とスリランカ先住民社会の事例から—」

関野文子 (京都大学)

第一部では、カメルーン狩猟採集民バカの女性による料理の分配における相互行為と負い目の発生について発表した。獣肉の分配とは異なり、料理の分配では調理時に相手を訪問するといった相互行為の連続により分配が促され、分配が流動的なものになっていると論じた。さらに、調理者や同じ場にいる者に対する姿勢や視線などの変化させ、時には相手との見えない境界を生み出すことによって、分配に伴う緊張感や負い目を回避させていると示唆した。

第二部では、昨年のスリランカでの調査報告を行なった。先住民地域における農村開発 NGO の活動やシュラマダーナと呼ばれる共同労働の事例を紹介した。観光化、首長の権威性の高まりなどを背景に、地域住民が利益の配分を巡る不満を持っていることや、開発支援に関する課題があることについて言及した。

「暴力の貸しを取り返しに行く」ーダサネッチにおける復讐／感染／代替の論理」

佐川徹（AA 研共同研究員、慶應義塾大学）

グレーバーの『負債論』は、人の命が数量化され交換可能となる局面に人間経済から商業経済への移行を見出すとともに、その局面に必ず物理的暴力が作用していることを強調する。本発表では、殺人により失われた命を「代替の論理」で処理しようとする際に生じる葛藤に焦点を当てた。東アフリカにすらダサネッチにおいて、殺人に対して物財を支払う血償の制度は集団内にも集団間にも存在しなかった。また、「敵」集団から攻撃された際には復讐攻撃がなされたものの、戦いの被害と戦果が厳密に比較されることはなかった。つまり、「一人の死には一人の死を」という数量化された相殺感覚は希薄だった。21世紀に入ると、政府は復讐を防止し平和を定着させるために「代替の論理」、つまり殺害者側集団が被殺害者集団側に政府が定めた頭数の家畜を賠償として支払う制度を導入した。ダサネッチは一度この制度を受け入れたが、まもなく家畜の受け取りを拒絶するようになった。これは、死者の命を物財と交換可能なものにするこゝへのつよい抵抗のあらわれである。あるダサネッチは、政府が考える「平和」（暴力的紛争の一切の停止）が達成されるための唯一の方法は、国家が軍隊や警察の力を用いて「敵」を殺した者を殺し、人びとに畏怖の感覚を抱かせることだと述べる。これは、「代替の論理」を拒否したダサネッチに国家暴力が行使されることを予感しての言明であると同時に、人の生命を交換可能にすることがはらむ問題に比べれば、戦いの原因をつくる一部の者が殺害されることのほうが「まだまし」であるという、人びとの認識が反映した語りでもある。

（佐川）

「国家とは何か」

酒井隆史（AA 研共同研究員、大阪府立大学）

報告では、ピエール・クラストルの人類学を手がかりに、国家について考察をおこなった。そこでは、クラストル以降の国家へのアプローチを、ひとまず「未開人アプローチ」と「野蛮人アプローチ」の二つに区分した。それらはともにクラストルの思考のうちに潜在していた傾向である。そのうえで、前者の系譜に残存する「進化主義」を後者が乗り越えていく可能性を示唆した。

（酒井）